

長崎大水害の体験談

昭和57年7月23日、長崎県中部から南部に停滞した梅雨前線は、降り始めから翌24日までの総雨量572mmの降雨を記録しました。特に長与町役場では、我が国観測史上最大の1時間で187mmを記録しており、土石流や山崩れなどが各地で多発し、多くの犠牲者と被害をもたらしました。これは、その大災害の体験談です。

体験談その1 川の氾濫だけを心配していた

■当時 53歳 Oさん 長崎市芒塚町

その日の昼頃に帰宅した時は、雨が降っていましたがいつも程度でした。雨は午後4時を過ぎた頃から激しくなって、午後7時頃になると近くの川で大きな石がぶつかり合いながら流れていく音がしていました。

午後8時少し前、川の野石を積んだだけの堤防が壊れているのではと心配になり、川を見に行くと川の水は半分位しかありませんでした。「変だな」とは思いましたが、家は川から10mほど離れていたのですから大丈夫と思い込んでいました。それから10分もたたないうちに、上の方で山が崩れて、電柱が倒され停電しました。そして川の水が半分になっていたのは、山から崩れてきた土砂や流木で川の上の方がせき止められていたのです。

自分の家は大丈夫と思っていたので、子供は風呂に入り、私は寝転んでいました。それでも雨の音があまりにも激しいので、ふと勝手口を開くと、その瞬間、家の中にダァッと水が入ってきました。慌てて家族みんなで外に逃げました。水は腰まであり、道路が川になっていて歩くことはできません。石垣を登りすぐ上の家まで非難しました。そこには3世帯が避難していました。

午後9時頃でしょうか、一息ついて着替えようとしたとき、ドサッという音とともに家の



国道34号線長崎市矢上付近の被害現場



崖崩れが起こった国道34号線長崎市芒塚付近

中に土砂が入り込んできました。この家を含めて3軒が土砂につぶされました。

自家発電設備を持っていた山の上の保養院に明かりがついていたので、そこに避難することにしました。真っ暗な土砂降りの中、道路という道路は川になっているなか、11人ほどが川を遡って、行けるところまで逃げました。行き止まりとなった付近の家で皆を休ませました。午後11頃、雨が小降りになったので、私一人で保養院に行く道を歩いてみたところ、何とかたどり着けました。そこには何人も人が避難していて、その中の元気な者が残った家族などを救出に向かってくれ、全員無事に避難できました。保養院では一晩中ラジオを聴き、何人かの知人が亡くなったことを知りました。

翌朝、保養院からの町の風景は一変していました。土石流に直撃され跡形も無くなった家、土砂に押しつぶされた家、濁流に流された家、川一面に土砂や大きな石が溢れ、谷が浅くなっていました。山がひとつ崩れてしまったようなところもありました。私の家は、1階が土砂で埋め尽くされていました。

体験談その2 翌朝には跡形もなくなっていた救出現場

■当時 45歳 Yさん 長崎市東町

あの日は、午後5時30分頃帰宅しましたが、雨の降り方がものすごく、空も真っ暗で、いやな感じがしていました。午後6時30分頃になると、山の上の方に住んでいた両親や弟たちが避難してきました。

それから30分ほどすると、上の方で家がつぶれて生き埋めになっているから救出を手伝ってくれと近所の人に言われ、弟と3人で向かいました。家の前の道路は、川のようになっていて、上に行けないため下において公民館に行きました。そこでさらに2人が加わって5人で救出に向かいました。

小さな懐中電灯を頼りに、足元を確かめながら歩ける道を登って行きました。ようやく目的地にたどり着き、つぶれた家の上に乗る瓦をはずしていたら、中から人のこえが聞こえます。そこを集中して開けていたら住人が家の梁に挟まれていました。大した道具もないので、ほとんど素手で救出しました。午後7時を過ぎていたと思います。

翌朝、救出現場を見に行きましたが、その家とまわりの家も全部流されて、跡形も無くなっていました。あの時助けていなければ、助からなかったし、時間がずれていたら私たちも助からなかったと思い、ゾーッとしました。



長崎市八郎川周辺被災状況

体験談その3 山全体が崩れ落ちてくるようだった

■当時 43 歳 Tさん

土石流は、少なくとも3回は来たようです。200mほど上から土石流が流れてきて、まずAさんの上にあったBさんの家がつぶされました。その時は、芋釜（サツマイモを蓄えておくための穴蔵）の中に親子3人が入り込んで、そこを壊された家の材木が塞ぐかたちになり、その上を土石流が流れていきました。Bさん親子3人は奇跡的に助かったのです。

Aさんの奥さんは、隣の息子さん夫婦の家に避難していました。Aさんも風呂に入ったあとに行くことになっていたそうです。しかし、息子さん夫婦の家が土石流に直撃され、生まれの間もないお孫さんを含めて、4人の方が亡くなってしまいました。

私は、土石流が山のでっぺんから落ちてくるのを見ました。土石流は、いったん大きな岩山にぶつかって流れを変えました。もし岩山がなかったら、もっと人家が密集していたところが直撃されていたと思います。土石流は、岩と岩がぶつかって火花を散らしながら滑るようにして落ちていきました。山全体が崩れおちてくるようで、生きた心地がしませんでした。

体験談その4 異様な臭いがしていた

■当時 47 歳 Hさん

私は家のなかにいましたが、ゴロゴロゴロと大きな雷が鳴ったような音を聞いて、何だろうかと家の外に出てみると、道路という道路が川のようになって、どンドン水が流れていました。しばらくして、水や木の混じった土砂が家の中に入り込んできました。その時、堆肥のような野菜が腐ったような、そんな異様な臭いがしたことを覚えています。

以前から雨がひどくなると直ぐに八郎川が増水していました。その日も川が氾濫するかもしれないと心配していましたが、まさかこんな山の上までは水はこないだろうと、そんなに危険は感じていませんでした。みんなそんな気持ちでしたので、上の方で家が壊されたと聞いた時はどうしてだろうと不思議に思っていました。翌朝早く、上の方に行ってみると大きな石が一面にゴロゴロ転がっていました。



国道34号線長崎市矢上付近の被害現場

体験談その5 ここで死んでもいいと動かない人も

■当時 65 歳 Iさん 長崎市鳴滝

あの日は、午後4時頃に空が真っ暗になったので、早めに帰宅しました。午後7時頃夕食中に、川が増水して危険になっているという知らせが入りました。自宅横の橋を見ると、激流が橋の上を越していました。町内を一巡すると、すでにいくつかの橋で激流が橋桁を越し

ている状態でした。

私の家は少し高いところに建てていたので水は入らなかったが、付近一帯は水浸しになっていて、冷蔵庫が浮いて流れていました。道路が陥没したところもありました。公民館には、6、70人が避難してきました。

川が鋭角的に流れを変える箇所では水が渦を巻いており、その川べりにあった木造2階建ての家に上から流されてきた家がぶつかっていました。2階にいた人は逃げられない状態になっていましたが、たまたま通りかかった警察の人たちに頼んで救出してもらい、私の家に連れて帰り休ませました。中には、「ここで死んでもいい」と言って、どうしても避難してくれない人もいて、苦労しました。



長崎市鳴滝町の被害現場

体験談その6 母を背中に必死で避難

■当時18歳 Bさん 西彼杵郡長与町

その日の夕暮れ、日中穏やかだった空に黒い雨雲が張り出し、突然、激しい雨が降り出した。帰宅途中の私は、あまりの雨の激しさに、前を向いて歩けない程だった。

午後7時頃家に着いたが、依然として激しい雨は降り続き、家の直ぐ近くにある長与川もわずか一時間足らずという驚くべき早さで満水となり、玄関まで泥水が押し寄せた。停電となり、ろうソクの光の中で慌ただしく家財道具が流されないようにしていると、畳が浮き始め、次々に水が湧き出てきた。「裏の



濁流で橋梁も電柱も車も流失した。
西彼杵郡長与町長与川水系高田川

家に避難してください」と近所の人の声がしたので、私は近くに住む、一人暮らしの老人を避難させなければと思い、老人を背負って道に出ると、道は川となっていた。水は腹位の高さで流れも少し急であったが、何とか無事に裏の小高くなった所の家に行き着いた。次に母を避難させる時には、もう水が胸位まで来て、流れも一段と急になっていて何かにつかまっていなくて流されそうだった。背中にしがみついていた母もあまりの流れの激しさに、給付に怯えていた。流れ来た自転車で怪我をした私は、流れに飲み込まれたら一卷の終わりだと思い、必死だった。壁伝いに流れに逆らいながら進み、やっとのことで避難することができた。

一時間ほどして雨も小降りとなり、水も引いたので家に戻った。家じゅう汚泥だらけ、全てのものは水浸しだった。ラジオは、身内の安否を気遣う人々の連絡をしきりに流していた。父は宿直だったので無事であることだけを願った。